

い ち ろ う                      み せ

# 市郎の店



げんさく    とよしまよ    し お

原作：豊島与志雄

か    か                      ひと    たばたさん    ど                      むみつえ  
書き換えた人：田畑サンドーム光恵

てつだ                                      ひと    にしお    さ    ち    こ  
手伝ってくれた人：西尾佐知子

す   て   き   え   か                                      ひと    と   れ   す   に   る  
ステキな絵を画いてくれた人：トレース・ニール

ある<sup>みなとまち</sup>港町に、<sup>いちろう</sup>市郎という<sup>おとこ</sup>男の子と<sup>かあ</sup>お母さんが<sup>す</sup>住んでいました。<sup>いちろう</sup>市郎のお父さんは<sup>はや</sup>早くに<sup>し</sup>死んでしまったので、<sup>かあ</sup>お母さんが<sup>ひとり</sup>一人で<sup>いちろう</sup>市郎を<sup>そだ</sup>育てていました。

<sup>いちろう</sup>市郎のお母さんは、<sup>かあ</sup>屋台で<sup>やたい</sup>ノートや<sup>えんぴつ</sup>鉛筆や<sup>おもちゃ</sup>おもちゃなどを<sup>う</sup>売っていました。<sup>やたい</sup>屋台というのは、<sup>みち</sup>道に<sup>お</sup>テーブルを<sup>しょうひん</sup>置いて、<sup>なら</sup>そこに<sup>たても</sup>商品を<sup>う</sup>並べて<sup>みせ</sup>売る<sup>ちが</sup>お店です。<sup>ふつう</sup>普通のお店と<sup>ちが</sup>違って、<sup>たても</sup>ちゃんとした<sup>たても</sup>建物<sup>たても</sup>がありません。<sup>やたい</sup>ですから、<sup>で</sup>屋台<sup>ひと</sup>が出るのは、<sup>あつ</sup>たくさんの<sup>とくべつ</sup>人が<sup>とき</sup>集まる<sup>とき</sup>特別な<sup>とき</sup>時<sup>とき</sup>だけです。<sup>たと</sup>例えば、<sup>しょうがつ</sup>お正月<sup>まつ</sup>やお祭りの<sup>ひ</sup>日<sup>なつ</sup>や<sup>よる</sup>夏の<sup>やたい</sup>夜<sup>で</sup>に<sup>で</sup>屋台<sup>で</sup>が出ます。

<sup>いちろう</sup>市郎の<sup>まち</sup>町の<sup>いちばん</sup>一番<sup>おお</sup>大きい<sup>みち</sup>道<sup>よる</sup>は、<sup>よる</sup>夜<sup>よる</sup>になると<sup>ひと</sup>たくさんの<sup>とお</sup>人が<sup>よる</sup>通ります。<sup>よる</sup>そこで、<sup>よる</sup>夜<sup>よる</sup>になると<sup>やたい</sup>屋台<sup>みち</sup>が<sup>で</sup>たくさん<sup>いちろう</sup>道<sup>いちろう</sup>に出ます。<sup>かあ</sup>市郎のお母さんの<sup>やたい</sup>屋台<sup>ひと</sup>もその<sup>ひと</sup>一つ<sup>ひと</sup>です。



ある<sup>とき</sup>時<sup>かあ</sup>お母さんが<sup>びょうき</sup>病気<sup>かあ</sup>になりました。<sup>やたい</sup>そして<sup>だ</sup>しばらく<sup>かあ</sup>屋台<sup>ともだち</sup>を出せ<sup>ともだち</sup>なくなり<sup>ともだち</sup>ました。<sup>かあ</sup>そこで<sup>ともだち</sup>お母さんは、<sup>ともだち</sup>友達の<sup>かあ</sup>和子<sup>かあ</sup>おばさんに<sup>じぶん</sup>自分の<sup>やたい</sup>屋台<sup>ひと</sup>をや<sup>ひと</sup>ってもら<sup>ひと</sup>う<sup>ひと</sup>ことに<sup>ひと</sup>しました。

<sup>じつ</sup>実は<sup>いちろう</sup>市郎は<sup>かあ</sup>ずっと<sup>やたい</sup>お母さんの<sup>かいがら</sup>屋台<sup>う</sup>で<sup>う</sup>貝殻<sup>おも</sup>を<sup>おも</sup>売<sup>おも</sup>て<sup>おも</sup>みたい<sup>おも</sup>と思<sup>おも</sup>って<sup>おも</sup>いま<sup>おも</sup>した。<sup>かあ</sup>そこで<sup>かあ</sup>お母さんに<sup>い</sup>言<sup>い</sup>いま<sup>い</sup>した。

「<sup>かあ</sup>お母さん、<sup>かずこ</sup>和子<sup>いっしょ</sup>おばさんと<sup>いっしょ</sup>一緒<sup>ぼく</sup>に、<sup>かいがら</sup>僕の<sup>う</sup>貝殻<sup>う</sup>を<sup>う</sup>売<sup>う</sup>ても<sup>う</sup>いい？」

かあ さいしょ こども やたい しごと むり い  
お母さんは最初は、「子供に屋台の仕事は無理だよ。」と言っていま  
した。でも、いちろう なんかい たの さいご  
市郎が何回も頼むので、最後には、

「じゃあ、どようび にちようび よる かずこ いっしょ やたい  
土曜日と日曜日の夜だけなら、和子おばさんと一緒に屋台で  
かいがら う  
貝殻を売ってもいいよ。」

い  
と言ってくれました。

どようび いちろう よろこ はこ かいがら や  
土曜日になりました。市郎はとても喜んで、箱いっぱい貝殻を屋  
たい も  
台まで持っていきました。これらのかいがら  
す。いちろう おじさんは、ふね の いろいろ ところ い  
市郎のおじさんは、船に乗って色々な所に行きます。そして、  
めずら かいがら み いちろう も かけ  
珍しい貝殻を見つけて、それを市郎のおみやげとして持って帰ってき  
ます。



いろ しろ  
ピンク色のものもあれば、白いのもあ  
ります。

おお ちい  
大きなものもあれば、小さいのもあ  
ります。

ま  
ぐるぐる巻いているのもあれば、  
ひら  
平たいのもあります。

いちろう かいがら じまん  
市郎は、これらの貝殻を自慢にしていました。だから、きっとたくさん  
ひと じぶん かいがら か おも  
の人が自分の貝殻を買ってくれると思っていました。

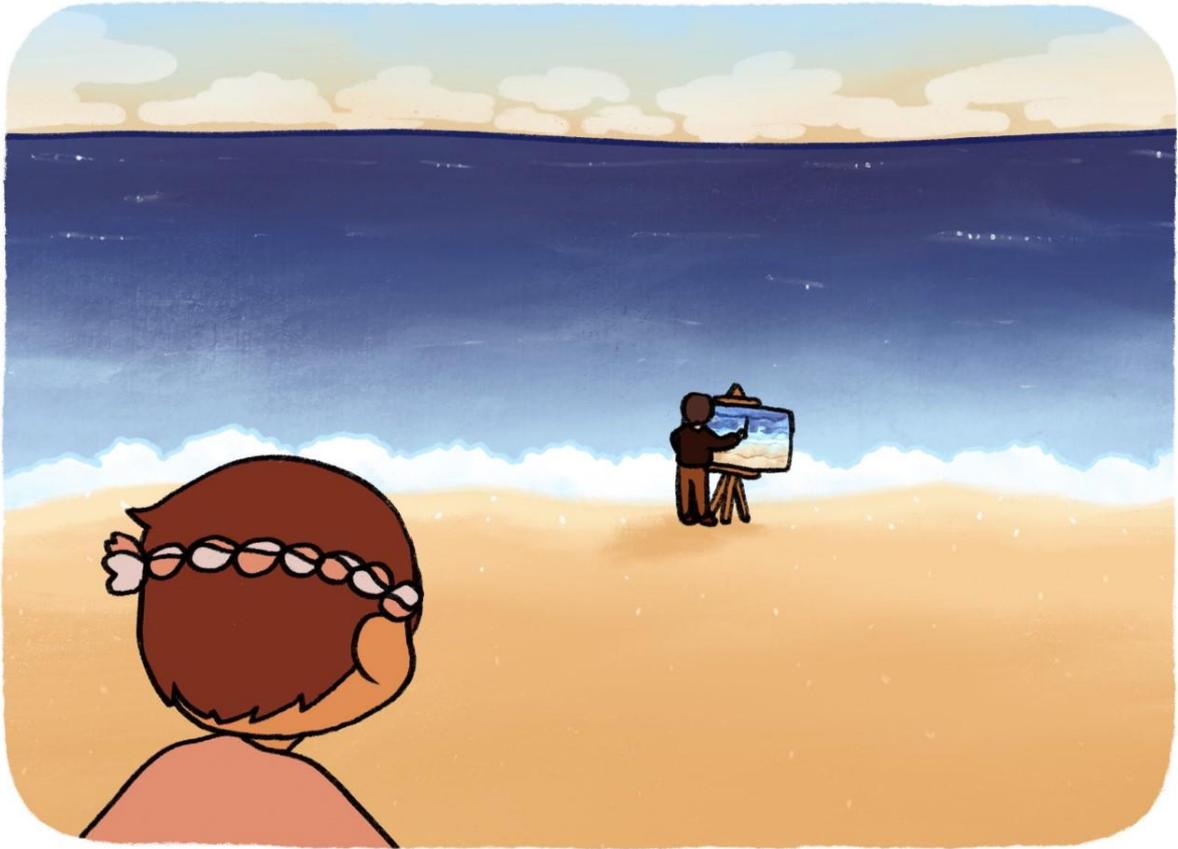
さいしょ どようび かいがら ひと う つぎ  
でも、最初の土曜日は貝殻は一つも売れませんでした。そして、次の  
にちようび ぜんぜん う つぎ しゅう どようび にちよう  
日曜日も全然売れませんでした。そして、その次の週の日曜日土曜日  
び かいがら ひと う  
日も、貝殻は一つも売れませんでした。



「どうしてだろう。。。どうして誰も僕の貝殻を買ってくれないんだ  
ろう。」

いちろう  
市郎はがっかりしました。

つぎ ひ げつようび いちろう  
次の日、月曜日、市郎は「どうしたら貝殻が売れるんだろう。。。」  
かんが  
と 考 え なが ら、 ビー チ を ある  
あ る  
歩 いて いた。 す る と、 やまかわ  
やまかわ  
の よう に え を 画 いて いた。 やまかわ が か  
が か  
と き ど き い ち ろ う  
か あ  
ん は、 やまかわ  
やまかわ  
の ズ ボ ン や せ び ろ  
せ び ろ  
ぬ  
を 縫 っ て あ げ て、 お 金 を も ら っ て い ま し  
か ね  
た。 い ち ろ う  
い ち ろ う やまかわ  
やまかわ  
は 山 川 さ ん に あ い さ つ  
あ い さ つ  
を し ま し た。



やまかわ  
「山川さん、こんにちは。絵はどうですか。」

「ああ、市郎君、こんにちは。僕の絵？まあまあってとこだね。市郎君  
めずら  
は珍しく散歩かい？」

親切に話してくれる山川さんに、市郎は、お母さんの屋台で貝殻を売  
ろうと頑張っているけど、全然売れないという話をしました。する  
と、山川さんはこう言いました。

「その貝殻はよく磨いたかい？」

「はい、ぴかぴかしています。」

「うん、でも、ぴかぴかしていても、ただ並べているだけじゃだめだよ。」

そう言われても、市郎には意味がわかりませんでした。ポカーンとして  
いる市郎に山川さんは説明してくれました。

「お客様に、市郎君がその貝殻を一生懸命磨いているところを見せ  
なきゃだめだよ。」

「磨いているところ？」

「そう。磨いているところを見せるのさ。あのね、例えばね、僕がこう  
してビーチで絵を描いているよね。するとね、たくさんの人が止まって  
見ていくんだよ。つまりね、人間というのはね、他の人が何か仕事をし  
て動いているのを見るのが好きみたいなんだ。だから、みんな、僕の絵  
を見ているんじゃないくて、僕が絵を描くところを見るのが好きなんだ  
よ。市郎君が貝殻を売るのも一緒だよ。

君が一生懸命貝殻を磨いていたら、1人か二人の人が止まって、  
『あれ、何をしてるんだろう。』って見るよね。そうしたら、他の人  
も、『あれ、何だろう。』って気になって止まって見ようとする。

そのうちの一人が、並べられている貝殻を手にとって、『この貝殻、  
きれいだわ。買っていこうかしら。』ってなったらしめたものだよ。

他の人も、貝殻がほしくなる。そして、みんなどんどん市郎君の貝殻  
を買おうとするよ。」

市郎は山川さんの話を聞いて、次の土曜日はさっそく屋台の横で貝  
殻を磨きました。真剣に磨きました。



すると、どうでしょう。

まず一人の男の人が立ち止まって、珍しそうに市郎のことを見始めました。そして、今度は若い女の人が立ち止まりました。気が付くと、たくさんの人が市郎の屋台の前に立ち止まっていました。そして、みんな口々に、「へー、あんな風に貝殻を磨いたら、こんなにぴかぴかになるのか。」と話しています。

その中で、ある女の子が、「お母さん、私、このピンクのぴかぴかしてる貝殻がほしい。」と言いました。同じように、小さな男の子が、「僕はこのくるくる巻いているのがほしい。」と言いました。

という風<sup>ふう</sup>に、この夜<sup>よる</sup>は、市郎<sup>いちろう</sup>の屋台<sup>やたい</sup>のテーブルの上<sup>うへ</sup>の貝殻<sup>かいがら</sup>は全部<sup>ぜんぶ</sup>売れました。

次<sup>つぎ</sup>の土曜日<sup>どようび</sup>と日曜日<sup>にちようび</sup>も、市郎<sup>いちろう</sup>は同じ<sup>おな</sup>ように屋台<sup>やたい</sup>の横<sup>よこ</sup>で、一生<sup>いっしょう</sup>懸命<sup>けんめい</sup>貝殻<sup>かいがら</sup>を磨<sup>みが</sup>いて見<sup>み</sup>せました。すると、屋台<sup>やたい</sup>のテーブルの上<sup>うへ</sup>の貝殻<sup>かいがら</sup>は全部<sup>ぜんぶ</sup>売れました。

月曜日<sup>げつようび</sup>。市郎<sup>いちろう</sup>はビーチ<sup>やまかわ</sup>に行き、山川<sup>さが</sup>さんを探<sup>やまかわ</sup>しました。山川<sup>やまかわ</sup>さんはいつものように絵<sup>え</sup>を画<sup>か</sup>いていました。

「山川<sup>やまかわ</sup>さん。こんにちは。」

「やあ、市郎<sup>いちろう</sup>君<sup>くん</sup>。貝殻<sup>かいがら</sup>の商売<sup>しょうばい</sup>はどうだね。」

「山川<sup>やまかわ</sup>さんに教<sup>おし</sup>えてもらったようにやったら、全部<sup>ぜんぶ</sup>売<sup>う</sup>れました。売<sup>う</sup>れすぎて困<sup>こま</sup>っています。」

「それはよかった。これでわかっただろう。これからも、『市郎<sup>いちろう</sup>の店<sup>みせ</sup>は、ただ売<sup>う</sup>るだけの店<sup>みせ</sup>じゃありません。仕事<sup>しごと</sup>もして見<sup>み</sup>せる店<sup>みせ</sup>です。』とおも<sup>おも</sup>って頑<sup>がん</sup>張<sup>ば</sup>るといいよ。」

山川<sup>やまかわ</sup>さんにそう言<sup>い</sup>われて、市郎<sup>いちろう</sup>は嬉<sup>うれ</sup>しそうにな<sup>な</sup>ずきました。

(おわり 1338 語)

